

漢字の意味とその獲得

沈 国 威

漢字の意味とその獲得

沈 国 威

一、字義問題の提起

中国語をマスターするには漢字の習得が必須である。漢字は中国語の基本単位であり、語そのものであったり、造語成分であったりするものだからである。漢字は、文字学のみならず、語彙学、ないし文法学の考察対象でもある。字と語は、そもそも同じレベルのものではない。英語、或いは日本語の語彙教育では、アルファベットや仮名に対して、それほど時間を費やしてはいないが、漢字の場合は事情が異なる。古典中国語においては、殆どの字は同時に語でもあった。現在、実際の状況が大きく変わったが、多くの人にとって字と語は相変わらず同じ概念である。

日本語を習う際も漢字が避けて通れないものである。また書記言語のレベルにおいてすでに漢字を使用していない朝鮮語とベトナム語でも、漢字の知識は、それぞれの言語の習得にプラスに作用する無視できない要素である。いわゆる漢字の知識とは、発音と書き方のほか、もっとも重要なのは、字の意味である¹⁾。新しい複合語を作るにせよ、既成の複合語を理解するにせよ、字義は、極めて重要である。しかしながら字義に対する理解はいまだに直感的で、あいまいな段階にとどまっていると言わざるを得ない。

字義とは何か？この問いは、明らかに「意味とは何か？」或いは「語の意味とは何か？」と同列に扱うことができない。ソシュールは、言語は、一種の記号体系であり、言語記号は、能記(signifier)と所記(signified)から成り立っていると指摘している²⁾。「所記」は概念であり、また意味とも

言う。「能記」は音声であり、「聴覚映像」とソシユールは呼ぶ。漢字を含む文字は有声言語を記録する記号であり、自然言語に対して、二次的なものに過ぎないと現代言語学は考えている。したがって文字としての漢字は、字義とは何か果たして理論的意味があるのか。漢字は中国語を記録する言語記号として、その意味、つまり字義は当然のことながら聴覚映像によって呼び起こされるものでなければならない。しかしわれわれが字義に言及する時、暗黙裡に聴覚映像よりも「視覚映像」とでも言うべきものに訴えようとするのである。われわれは無意識のうちに字義を視覚においてのみ捉えうるものと考えている。漢字三要素と言われる「音形義」では、字形が、字音、字義と同列に扱われていること自体、視覚の重みを象徴的に物語っている。漢字のこの視覚的特徴は、他の文字体系が持つ性質以外に³⁾、漢字独特の性質として漢字特異論に繋がっていると思われる。字義は如何に意識され、呼び起こされ、何によって支えられているのか。われわれはどのように字義を獲得し、それを心理的実在とさせたのか。そしてこの問題は、中国語、日本語教育においてどのような意味があるのか。本稿はそれについて考えてみたい。

二、字義から見る漢字の類型

漢字三要素と言われる音形義の中では、字形はもっとも直観的で、字音も物理的属性を持つ。字義だけが心理的実在である。しかしこの視覚的な「字義」は、他の文字体系にないか、或いは重要ではないものと言えよう。中国語の母語話者は、漢字には必ず意味があると捉えがちであるが、すべての漢字に音形義が備わっているわけではないと認識する必要がある⁴⁾。まず「躊躇、彷徨、徘徊」のような「連綿字」は例外であろう。一方、無意味の連綿字とは反対に、字が同時に語である場合、即ち「一字語」には常に複数の意味がある。例えば「吃」には、7つのよく用いられる意味がある。

1. 食用する（吃面包 [パンを食べる]）
2. 頼る（吃老本 [過去の栄光にすがる]）
3. 液体を吸収する（这种纸不吃墨 [この種の紙は墨を吸わない]）
4. 消滅（吃掉敌人 [敵を殲滅する]）
5. 耐える（吃不住 [耐えられない]）
6. させられる（吃惊 [びっくりする]）
7. 消耗する（吃力 [骨が折れる]）

よく用いられる一字語ほど、多義的であることは、次の表から読み取れる。⁵⁾

漢字	下	出	生	热	大	心	水	地	手
意味	27	14	20	9	9	4	7	13	7

いくつもある字義の中に、際立っている意味もあれば、漠然たる意味もある。前者は強く意識されるが、後者は、複合語、或いはフレーズの中にしか確認できない。

理論的に言えば連綿字以外、漢字には意味がある。少なくとも当該の漢字が作成された当時には意味があった。しかし長期にわたる使用の過程で、種々の原因により字義が摩滅した。次のような場合、字義があいまいであり、専門的教育を受けた人でも容易に言い表せない⁶⁾。

- (1) 難解字 この種の漢字は使用頻度が非常に低い。つまり非常用漢字である⁷⁾。例えば、趸 dūn 货、兵燹 xiǎn、挑衅 xìn、和藹 āi、麻痺 bì、奢侈 shē chí、博弈 yì などである。難解字は非常用漢字であるが、それを含む複合語は非常用語では必ずしもないので、中国語学習者にとって大きな障害である。
- (2) 失義字 この種の字は、使用頻度が高く、常用字ではあるが、正

確に意味が言えないものである。例えば、「校」は、「校園、校長、学校、夜校」など100を超える複合語に使用されているが、字義があいまいである。「菠菜、渤海、范畴、华侨、彗星、楷书、昆虫、婴儿、苹果、荞麦、书肆、贪婪、哲学」などにおける下線部の漢字もこのタイプである⁸⁾。

- (3) あいまい字 このタイプも常用漢字の部類に入るが、複合語での意味は、われわれが意識できるものではない。つまり常用字の非常用的意味である。例えば王艾録は次のような例を挙げている。⁹⁾

长 <u>城</u> 、城＝墙	<u>寻</u> 常、古代の長さの単位
<u>失</u> 声、失＝コントロールが利かない	<u>郑</u> 重、郑＝？
<u>清</u> 楚、楚＝？	自 <u>首</u> 、首＝？
知 <u>道</u> 、道＝？	

下線部の漢字について、複合語の中で使用されているのはいずれも一般に知られていない意味である。王艾録が指摘した通り、中型の国語辞書ではこれらの意味についての記述はない。上述したように漢字に複数の意味項目がある時、際立っている意味もあれば、漠然たる意味もある。しかし複合語において必ずしも際立っている意味が使われているとは限らない。例えば、「讨」は「征讨、索取、请求、娶」などの意味が際立っているが、複合語「讨论、商讨、探讨」などで生かされているのはこの意味ではない。この点は非常に重要である。つまり字義が複合語等の長単位の意味を決定するのではなく、複合語等の長単位が字義を決定するのである¹⁰⁾。

「識字率」という言葉がある。何をもって「識字」というのだろうか。また「この字を知らない」という時は、知らないのは、結局「音形義」という三要素の中のどれだろうか。或いは例えば外国人学習者から「この字はどういう意味か」と尋ねられたらどのように答えればよいか。ある漢字を知っているということは、何を意味するのか。発音できるのか、正しく書

けるのか。それとも正確に意味が言えるのか。もし「音形義」という三要素をクリアしなければ字を知るとは言えないようであれば、われわれが知っている漢字の数は大いに割引せざるを得ない。意味がわかれば、知っているとなれば、うまく意味が説明できない、例えば前述した「昆、校、楷、哲」等について知っていると言えるだろうか。問題を外国人中国語初級学習者に限定した場合、直接指示法（実物を指示したりジェスチャーをしたりする）と翻訳法（学習者の母語を利用する）を思い出されるだろうが、ここではそれ以外の方法について考えてみよう。

- (一) 定義法、つまり字の意味を定義的に説明していくことである。例えば、「吃」の意味は、「把食物等放到嘴里经过咀嚼咽下去（包括吸、喝）」；「书」の意味は「装订成册的著作」などである¹¹⁾。しかし、実際教室ではこの方法を取ることは少ない。というのは、学習者は、「吃」「书」そのものの定義より、自分の言語ではどの語に当たるかを知りたいだけである。時には、教師は、文を作って、例えば「吃」は、「我吃饭」「他吃了一个面包」のように説明する。この時は、字義を解釈するというより、語としての用法を説明するのである。
- (二) 代替法、ある字を別の字で解釈する。例えば、「餐」はつまり「吃」という意味、「饮」はつまり「喝」という意味、「隘」はつまり「窄」という意味、といった方法である。解釈に用いる字は、ふつう文の成分として自由に使える「一字語」であって、解釈される字は、単独で使えない拘束形態素である。語は、拘束形態素より上位の単位であり、形態素を解釈できるが、その逆はできない。拘束形態素は、文の他の成分と直接関係を持たず、その分、意味もあいまいだからである。このような相互に解釈するという方法は、「互訓」とも言うが、両者の間に古語と現代語、或いは文言と

白話の対応関係が存在し、語彙の古今の変遷を反映するものと考えられている。現代中国語では殆どの一字語にこのような拘束形態素との対応関係が存在している。

- (三) 複合語による解釈。つまり複合語で字を解釈する。というのは、すべての拘束形態素にそれと対応する一字語があるとは限らない。或いは一字語による解釈が適切と言えない場合である。その時は、複合語によって解釈しようとするのである。例えば、「緝：聚集」、「緝：搜捕、捉拿」などである。ただし一部の字については、例えば「备、哲、昆、楷、舒、嫉、婪」を解釈するとき、当該の字を含む複合語を用いて解釈せざるを得ない。例えば「备」は、「准备」の意味である、或いは、これは「昆虫」の「昆」、「哲学」の「哲」というふうに。方法論的に言えば、このような堂々巡りのやり方を避けなければならないが、避けられそうもないのが現実である。というのはこれらの字は、ごく少数の、場合によっては特定の複合語にしか現れないものである。例えば「昆」は、「昆虫」の中にしか現れない。宮島達夫氏がかつて指摘した「唯一形態素」である。唯一形態素たる字は、常用字であるにもかかわらず、字義があいまいで、説明するのは難しい。

三、字の文法的地位と字義の関係

字義は当該の字の文における文法的地位と密接な関係があると思われる。文法上の性質から見れば、漢字には以下のような種類がある。

- (1) 字は即ち語である。

1つの漢字が語として使えるものを中国語学では「単音節語」という¹²⁾。古代中国語では単音節語が主で、全語彙数の80%を占めているという。しかし、現在は状況が大きく変わった。現代中国語では単音節語が少数派と

表 I

一級	二級	三級	三級付録	合計
482	517	413	61	1473

表 II

	一級	二級	三級	三級付録	合計
名詞	163	147	114	17	443
動詞	226	287	263	44	820
形容詞	81	106	48	6	241
副詞	46	26	23	0	95
合計	516	566	448	67	1599

なり、『漢語水平詞彙與漢字等級大綱』（修訂版）には、実質語である単音節語は 1727 語あり（数詞、量詞、介詞、助詞等の虚詞を除く。ただし名詞・量詞、動詞・介詞等の兼類詞は含まれる）、全収録語数 8822 語の 19.6 % を占めている。筆者は、この比率は明らかに過大であると考えている。語が拘束形態素かに関する判断基準が緩過ぎて、中国語の実情から乖離している。例えば、「餐、食、飲」など単独で使えないものまで一字語と認定されている。このような状況は、『漢語国際教育用音節漢字詞彙等級劃分（国家標準）』（以下『等級劃分』と略す）では改善が見られた。『等級劃分』には一字語が 1473 語収録されており（条件同前）、全収録語数 11092 語に占める割合は 13.3% に下がっている。一字語はその殆どが基本語彙であり、使用頻度の高い名詞、動詞、形容詞、副詞が含まれている。ただし表 I のように等級によるばらつきは必ずしも観察されない。

一字語は品詞別、等級別に整理すれば表 II のようになる（いわゆる兼類の語があるため合計が多くなっている）。動詞がもっとも多く、名詞、形容詞はそれに続く。分布は、傾向として上級になるほど減少しているが、動詞の減少は顕著ではない。これは上級語彙の中にも「持宠筹辞赐盗逢赴」

等の文章語の動詞と共に「熬扒踹憋窳搓叨抖捌」などの口語専用の一字動詞が数多く存在しているためである。口語専用の一字動詞は漢字知識のある日本人学習者でさえ馴染みの薄いものである。

(2) 字は拘束形態素である。

上述した通り、文の成分として単独で使用できない形態素が、拘束形態素である（中国語学では“粘着語素”という）。ある特定の複合語の中にしか現れない形態素はまた「唯一形態素」と呼ぶ（中国語学では「単現語素」という）。ある形態素が、唯一かどうかは、個人の教養と調査範囲に関係する。例えば次の漢字は、

阐 础 磋 措 耽 甸 谍 杜 溉 辜 骇 阕 焕 疾 卉 贿 稽 東 沮 凯 勘 苛 黎
赂 侶 玫 弥 緬 陌 漠 帕 畔 袍 沛 抨 烹 鹏 萍 戚 洽 浹 嵌 乔 擎 攘 溶
冗 瑞 膳 贍 绍 绅 嗜 墅 祀 溯 汰 惕 颓 惋 瘟 紊 涡 熙 嬉 侠 宪 岬 汹
旭 恤 酗 絮 衍 殃 秧 怡 屹 绎 荫 殷 荧 咏 逾 馭 郁 陨 脏 凿 藻 瞻 肇
哲 徹 郑 峙 窒 贮 铸 撰 拙 灼 咨

国語知識の豊富な中国語話者なら、1つ以上の複合語が想起できるかもしれない。しかし外国人学習者、特に学習の範囲を『等級劃分』の11092語に限定した場合、上記の漢字は、1つの複合語にしか現れない。つまり『等級劃分』を学習範囲とする学習者にとって、上記の漢字は、どれも唯一形態素となる。宮島が指摘しているように、理論的に言えば唯一形態素の意味が認識できない。漢字の場合、意味が摩滅されたという方が事実合致するが、いずれにせよ、字義の認知は非常に困難で、その字を含む複合語で説明せざるを得ない。

ところで、ここではわれわれは「逆推」という現象を意識的に無視した¹³⁾。複合語の成分の意味は、場合によっては片方の成分から推測するこ

とができる。これが逆推である。例えば「驾驭、惋惜、紊乱、酗酒、陨落、瞻仰、绽放」などの語の中の下線部は、その意味が片方の成分から推測できる。母語話者の逆推の能力は非常に強い。外国人学習者も訓練を通じてこのような逆推能力を身に付けなければならない。

一般的に言えば、唯一形態素のような字義のあいまいなものは、語彙学習の対象とすべきではない。複合語を通じて学習したほうが効果的である。つまり個々の成分となる漢字の意味を意識せずに、複合語全体をひとつの対象とし、その意味を覚えなければならない。

(3) 字は音節の単位である

連綿字と音訳等に使用されている漢字は、音節を記録する記号に過ぎず、このような字は、音節字と呼ぶほうが事実に近い。当然のことながら音節字には字義がなく、或いは、字義を排除しなければならない。音節字の例には、「玻 啡 恢 圾 咖 垃 璃 慢 啤 萃 葡 萄 艾 卜 迪 吩 咐 脞 蛄 蛄 踌 躇 仿 佛 恍 惚 徘 徊……」などがある。連綿字は二字以上で語を構成する。例えば、「躊躇、仿佛、恍惚、徘徊」などで、音訳語も二字以上のケースが多い。例えば、「葡萄、克隆、沙发、玻璃、高尔夫、歇斯底里……」などである。「酷」「打」は、数少ない一字の音訳語である。（「打」は数量詞なのでいつも数字と一緒に使用する）『等級劃分』にある 3000 字のうち、以下のような使用頻度の高い音節字が多数リストアップされている。例えば、

艾 澳 叭 狍 彬 缤 玻 卜 嫦 匆 迪 哆 俄 巴 啡 芬 吩 纷 咐 脞 丐 蛄 脞
耿 瑰 赫 啤 徊 凰 恍 恢 霍 圾 咖 卡 吭 垃 喇 磊 璃 潦 咧 咙 咙 窿 碌
萝 慢 氓 茫 髦 朦 姆 徘 乓 啤 乒 萃 菩 葡 萨 什 斯 嗦 萄 哇 呜 潇 汹
伊 唠

言うまでもなく、音節字の教授法は、他の漢字の教授法と異なるだろう。

この場合も複合語単位が効果的である。

四、字義と造語力

1つの形態素からできた語は、単純語という。例えば、「人、吃、大、葡萄」などである。1つ以上の形態素からできた語は、複合語である。例えば、「中国、学习、巨大、葡萄酒」などである¹⁴⁾。中国語の複合語は、漢字で構成されるのだが、すべての漢字に新語を造出する力があるわけではない。一般的に、(一) 一字の動詞、文法辞は新語造出力が弱い；(二) 字義があいまい、或いは無意味の字は新語の造出に関与しない、ということが言えよう。これはもちろん全体の傾向であり、例外も存在する。以下、詳しく見てみよう。

中国語の名詞は、直接他の名詞を修飾することができる。自由形態素にせよ、拘束形態素にせよ、強い造語力を持つ。形容詞はほぼ名詞と同じく、自由形態素、拘束形態素ともに複合語を構成することができる。名詞、形容詞に比べれば、一部の副詞、代名詞は語構成に参加しない。例えば、「很、也、我、你」などは複合語に現れない。動詞の事情が少し複雑である。一字語の動詞は造語力が特に強いわけではない。例えば「吃」であるが、『現代漢語詞典』の見出し語「吃」の項目には、以下の複合語が示されている。「吃／＼醋、吃／＼饭、吃／＼惊、吃／＼苦、吃／＼亏、吃力、吃素、吃香、吃相、吃／＼准」などである。成分間の「／＼」は、他の成分が割り込むことを示す。つまりフレーズであって、複合語ではないということである。『等級劃分』の中に「吃」を造語成分として持つ単位に、「吃饭、吃惊、吃亏、吃苦、吃力、好吃、小吃、口吃」などがある。『現代漢語詞典』では、「吃饭」の語釈は、「生活或生存。例如“靠天吃饭”」とあり、すでに具体的な動作を表すのではなく、比喩の用法になっている。一字語の動詞を含むフレーズは、イディオム化して始めて辞書の見出し語として収録される場合が多い。『等級劃分』にある「吃饭」は、初級語彙に区分された点から見れば「ご飯を

食べる」という意味であって（イディオム化されていない）、「吃＋飯」の連語でしかない。このように一字語動詞を含む単位は、緊密に結合していないものである。一方、動詞性の拘束形態素は、高い造語力を示している。例えば、「吃」と同義関係にある「餐、食」は次のように多くの複合語を構成している。

餐：餐车、餐桌、餐馆、餐巾、餐具、餐厅、餐券……

食：食品、食谱、食盐、食堂、食物、食油、食糖……

「吃」を含む単位は、強い口語性を持つ。対して、「餐、食」によって構成された複合語は、書面語の色彩が強い。その他の一字語動詞にも同じ傾向が看取できる。

動詞性成分は、なぜ造語力においてこのような違いを見せるのだろうか。これは動詞の意味形式と密接な関係がある。語の意味は、概念的意味と文法的意味に分けることが可能である。概念的意味は、辞書義とも言う。これは言語形式と外部世界との関連における人間の意識の反映である。文法義は、言語成分が有する文法的特徴である。品詞によっては概念的意味、或いは文法的意味しかない。例えば名詞と一部の副詞は、文法義がなく、介詞、助詞等の虚詞は概念的意味がない。動詞、形容詞は用言とも呼ばれ（中国語学では「謂詞」）、用言は、概念義と文法義の両方を兼ね備える¹⁵⁾。概念義は同じで、文法義は異なる一群の語は、例えば名詞、動詞、形容詞、副詞などで1つのワードファミリーを構成する。ここでは仮に「詞族」と呼ぶ。形態変化をする言語では、文法義は、語形の屈折変化（或いは派生）によって実現し、同じ詞族のメンバーには共通する語根を持つ。したがって語形において共通する部分がある。英語、日本語ではこのような例は枚挙に暇ない。

中国語は、形態変化のない言語と言われる。これには二つの意味がある。

一、語形（漢字）だけでは、文法義が確定できない。二、語形から概念義と文法義を切り離すことができない。英語、日本語と違って、中国語の文法義は、形態変化以外の形で実現するのである。例えば、名詞に対する支配関係は、語順によって実現される。学習者は、「吃饭」「唱歌」「看书」から V + N という語順は、述語動詞と目的語名詞の文法関係を示して帰納する。動詞が名詞を修飾するとき、助詞「的」が必要である。例えば「吃的饭」「唱的歌」「看的书」などである。しかし「的」を含む構造はもう複合語ではなく、フレーズである。新しい複合語を得るために、場合によっては文法義を排除し、概念義だけを抽出する必要がある。英語の動名詞形式-ing や日本語の動詞連用形は、いずれも文法義を打ち消す手段である。文法義を打ち消された動詞は、直接名詞を修飾することができ、複合語を作り上げることができる。中国語では、動詞が名詞を支配する支配関係と動詞が名詞を修飾する修飾関係は同じ語順であるので、文法義を持つ動詞は、直接名詞を修飾することができない。中国語では、概念義しかなく、文法義のない成分を別途用意しておかなければならない。多くの一字語動詞が、意味的に対応する拘束形態素を持つのはそのためである。

外国人学習者のために準備した漢字教育大綱には、多くの同義字が存在している。『等級劃分』はその現象を如実に反映している。なぜこうでなければならないのか。語の古今の変遷の結果に過ぎないのか。上述した分析から分かるように一字語動詞とそれと同義の拘束形態素がそれぞれ異なる役割を担っている。それぞれシンタクスと造語の見地から捉える必要がある。

五、「字本位教授法」について

中国語の漢字は、同時に多くの役割を担っている。書記の単位であり、また発音、意味、文法の単位でもある。中国語の歴史において、「字」は即ち「語」である時期が長かった。現在も、両者を必ずしも区別しない。一

定量の漢字を習得したことは、中国語の語彙をマスターしたこととは全く同じことではないが、密接な関係がある。現代中国語において「字」と「詞」はいったいどのような関係なのか、両者の間に行き来する通路はあるのか。筆者は、中国語母語話者にとって、答えはイエスであり、これが語彙学習の成功を握る鍵と考える。しかし外国人学習者はどのようにすれば母語話者と同じような「字詞通路」を作れるのか。或いは教師はどこまで助けることができるのか。中国語の語彙教育に関して、「字本位教授法」を提唱する人がいる。「字本位教授法」は、また「語素教授法」とも言う。この教授法の提唱者は、漢字は中国語の基本単位であり、外国人に対する中国語教育において、漢字を学習対象の中心に据え、漢字を通じて複合語を理解し、効率的に語彙を習得し、それを拡大させていくべきであると主張している。実際の教育現場では、「新出単語表」を「新出漢字表」に置き換え、字義の説明を行うと同時に、語構成の法則も教え、このような知識によって新たに遭遇した複合語の意味を理解するか、その意味を推測するという方法である¹⁶⁾。しかし、「字本位教授法」の前提条件は、(一) 漢字には説明可能な字義がある；(二) 複合語の意味は、字義と造語法によって導き出せるということである。漢字は、中国語の基本単位であり¹⁷⁾、大部分の漢字は、形態素でもある。現代中国語の数万の複合語は、3000 前後の漢字によって構成されている。漢字の知識を運用し、複合語を理解することは、言うまでもなく理想的な方法に違いない。しかし、「字本位教授法」は、実際の運用において一連の克服できない障害に出会うであろう。まず前述した通り、個々の漢字の字義は非常に複雑で、それを説明することは容易なことではない。したがって字の意味を説明することにより個々の漢字を学習、記憶することは効果的ではない。また、複合語の構造は、その意味との間に規則的な関連性が存在しない。字義の和は、語そのものの意味に直結しない。とはいえ、中国語のもっとも基本の単位は漢字であり、日常の中国語は、2500～3000 の漢字によって記録されている。漢字の知識は、疑

いもなく中国語の能力と正比例の関係にある。この点からすれば「字本位教授法」の提唱は、理にかなうものである。問題は、字義から見れば漢字は均質的なものではなく、区別して考えなければならない。つまり「字本位教授法」は、すべての漢字に対して有効なものではなく、その射程を見極める必要がある。筆者は、字義の類型により、『等級劃分』に収録された3000字を次の5種類に細分した。

第1類：自由形態素、単独で語となりうる漢字、実詞に属し、1200余字；

第2類：拘束形態素、字義があり、実語素に属し、1500余字；

第3類：拘束形態素、字義なし、100余字；

第4類：音節単位、字義なし、100余字；

第5類：機能成分、主に介詞、助詞などで、300余字；

上記の分類には重なる部分もあり、合計の字数は、3000を超えている。第5類は、機能性の成分、介詞、助詞、助数詞、方位詞等の虚辞や一部の副詞を指している。機能的成分は、言語の枠組みを築くものであり、文を構成するには必須の成分である。主な機能辞、例えば「在、从、给、把、被」などの介詞は、初級段階からの文法学習の内容である。第4類は音節字であり、連綿字や外来語を表すのに用いられる漢字、人名用字などである。字義がなく、意味の角度から説明する必要がないもので、複合語の全体的意味を記憶すればよいものである。第3類の字は、字義がない点では第4類と同じであるが、その多くは「唯一形態素」である。要するに3類、4類の漢字は、いずれも複合語の問題であり、漢字の問題ではない。「字本位教授法」は、この2種類の漢字には適切ではない。第1類の漢字は、一字語であり、基本語彙がその大部分を占めている。この類の漢字は、漢字教育のみならず、語彙教育の対象でもある。第1類の漢字の教え方は、他

の語の教え方と同じである。つまり発音を覚え、意味を把握し、使い方をマスターするのである。「字本位教授法」は、語彙教育における複合語の問題を解決しようとするのであるが、第1類の漢字の知識は、未知の複合語に遭遇した際、その意味理解にプラスに作用するのか。言い換えれば、これらの漢字は、それを含む複合語とどのような関係にあるのか。ここではそれ以上深入りする余裕はないが、大まかなことを言えば、基本的に一字語の意味で使用するか、イディオム化するかである。後者は字の意味を押さえるだけでは必ずしも有用ではない。

第2類の漢字は拘束形式だが、字義がある。字本位教授法の主な対象となろう。しかし同じく第2類の漢字ではあるが、字義に違いが見られる。おおよそ次の3種類がある。

- (1) 第1類の漢字（括弧の中で示す）と同義関係を形成するもの。例えば、餐、食（吃）；巨、宏、伟（大）；颜、颊 jiá（脸）；颁（发）；壁、垣（墙）；币、帑 tǎng（钱）、舶（船）；喝（饮）；碧（绿）；糙（粗）；呈（献）；抵（挡）；奠（祭）；达（到）；缓（慢）；恭（敬）；绘（画）；炊（烧、煮）；借（贷）；赁（租）などである。字数から見れば、400～500字前後となる。（個人の国語能力によって変動する）。この種類の漢字については、一字語との意味関係を明示する必要がある。「吃」を学習するとき、ついでに「餐、食」を教え、「大」を学習するとき、同時に「巨、宏、伟」を提示する。このような方法により、複合語に対する理解が深められる。当然のことながら、字義が同じであっても、字形、発音上に大きな相違が存在するので、非漢字圏の学習者にとって負担にはなるが、少なくとも日本人学習者にとっては、近道となる。
- (2) 一字語には必ずしも対応しないが、しかし同義、類義の拘束形態素がある。例えば、「案-档、堡-垒、臂-膀、部-分、材-料、仓-

库、暢-快、嫉-妒、陶-瓷、卑-鄙、陋；场-所、地、逞-炫、耀」などである。これらの同義、或いは類義の漢字は、よく並列構造の複合語を形成するので、教える時も、漢字と複合語とを関連づけて教えるべきである。

- (3) 意味的に対応する漢字がないものである。例えば「磅、胞、鼎、闺、桂」などである。これらの字は上述した第3類の漢字と同じく、必ず複合語の中において記憶しなければならない。幸いにしてこのタイプの漢字は字数が多くない。

ここで特筆すべきは、300字ほどの名詞性のものである。例えば「本、棒、宝、豹、杯、鼻、翅」などである。これらの字は、口語では常に二字形式に整えておく必要がある。つまり、二字形式にして始めて自由に使える語となるのである。例えば「杯、宝、翅」に「子、贝、膀」を後接させ、「杯子、宝贝、翅膀」にすることである。

要するに、第2類の漢字は、字義がはっきりしているものもあれば、あいまいとなったものもある。字義が複合語に反映されたものもあれば、投射されていないものもある。

六、日本語の漢字とその字義について

中国語の他に、日本語は唯一継続して漢字を使用する言語である。戦後(1945)、日本は漢字制限の国語政策を採る。1948年に『当用漢字表』が制定され、1982年には『常用漢字表』が公表された。前者には、1845字が収録され、後者には、1950字が納められた。2010年、日本は『常用漢字表』を修正し、『新常用漢字表』を公表した。『新常用漢字表』では、196字増加し、5字削除され、合計漢字が2136字収録されている。コンピュータの普及と処理能力の向上により、実際の言語生活において漢字の使用量が増加した¹⁸⁾。義務教育を終えた日本人は、だいたい2000ほどの漢字を知っ

ている。字音の他に字形、字義も中国語と日本語との間に大きな相違が存在していることを忘れてはならない。

長い間の受け入れ、消化を経て、漢字はすでに日本語と切り離すことができない一部分となった¹⁹⁾。明治維新以降、漢字廃止運動、漢字の使用制限、ローマ字運動など様々な動きがあったが、漢字を排除することができなかったところか、かつてデジタル化の障害と目された漢字は、電子計算機のハード、ソフトの発展により、昔の栄光を取り戻したかのようにも見える。『新常用漢字表』では、191 字と増加に転じたのである。それでは、漢字は、日本人にとってどのような心理的実在であろうか。日本語を学習する際、漢字の問題をどのように解決すべきなのか。

漢字を受容する長い歴史の過程にいて、日本語の漢字には「字音」と「字訓」が形成された。いずれも漢字に対する日本語話者の「聴覚映像」になるが、前者は弱い聴覚映像でしかないと言えよう。また、字音と字訓の分布は均質なものではない。2136 字の新常用漢字を例に取れば、

1. 「音」を持つ漢字、2059 字
2. 「訓」を持つ漢字、1317 字
3. 「音」と「訓」を両方持つ漢字、1240 字
4. 「音」があるが、「訓」のない漢字、819 字
5. 「訓」があるが、「音」のない漢字、77 字

いわゆる字訓は、固有の日本語で漢字の意味を解釈するものである。荻生徂徠は、訓は即ち翻訳であるとも指摘している²⁰⁾。「訓」は、日本語の意味体系と中国語の意味体系との間に存在している緊張関係を表すもので、漢字の受容史と日本の用字習慣を反映している。漢字と字訓の間に「同訓異字」と「同訓異義」の問題が存在しているが、紙幅の関係で、ここでは深入りしない²¹⁾。日本語における「字」と「訓」の関係について、森岡健

二は「文字形態素論」を提唱している²²⁾。森岡によれば、日本語話者は、長きに渡る訓練を通じて、漢字を仲介に字音と字訓を結びつける（一体化）ことに成功した。同一の漢字は、文脈によって字音と字訓が選択される。このように字音と字訓はあたかも同一漢字の異形態のように振る舞う。一種の形態素であり、文字形態素と呼ぶ所以である。音訓相通は、日本語話者の漢字力を反映するものである。日本人にとって字義とは、常に字訓のことである。日本人にある漢字の意味を問いただしたら、字訓が答えとして返ってくるのが常である。字訓がない場合、複合語による解釈が行われる。要するに、字訓は字義を固定化させ、心理的実在となったのである。字訓がなければ漢字の地位も危うくなる。朝鮮語、ベトナム語がよい事例である。ただし「同訓異字」は学習者の負担を増大させた。戦後の日本では一字多訓、一訓多字の現象に制限を加える国語政策が採られている。新旧の『常用漢字表』は、この事実を反映している。字訓に対する制限は、学習者の負担を軽減させることに成功したが、多くの漢字の字義を同時に弱めた。日本語母語話者にとって、字音は、弱い聴覚映像であり、字訓は強い聴覚映像である。前者は「所記」を呼び起こすには力不足で、後者こそ字義の支えである。

上述した通り、日本人は、下記のルートにより漢字の意味を獲得したと思われる。

- 1、音訓相通、転換²³⁾
- 2、逆推
- 3、人名用漢字
- 4、中国的成語、格言など

1、2に関しては、繰り返し述べないが、3、4は、日本人の漢字知識が『常用漢字表』を超える主たる原因である。現在、日本で正式に定められた

人名用字は 861 字あるが、人名用字の読みに関していかなる規定もされていないので、人名用字に同訓異字の現象は多く見られる。例えば、「佳子、好子、淑子、良子、善子、美子、慶子、吉子」などではいずれも YOSHIKO と読むことができる。これは無意識のうちに『常用漢字表』の制限を突破した。中国の典籍から来る成語、格言などの中にも多くの『常用漢字表』に規定されていない「訓」が用いられる。例えば、「刎頸の交わり」「籌を帷幄の中に運らす」などである。いずれも漢字の字義に貢献している。

七、結 語

本稿では、日中両言語における漢字字義について考察した。漢字は、近代以降「能記」という言語記号として、視覚から聴覚への変化を加速させていると筆者は考えている。これはつまり「読む」から「聞く」への変化である。意味の聞き取りに大きな困難を伴う聴覚映像としての単独の漢字、つまり一字語が減少し、二字語が増加、定着したのは、その手段である。この変化は、日本では明治時代から、中国では 1919 年の五四新文化運動から始まったものである。その原因は、近現代社会におけるマスメディアの発展により、音声言語がより重要性を増したためと考えられる。要するに漢字の音形が短く、聴覚映像を呼び起こすには刺激が弱すぎるからである。現代中国語の二字語の増加は、聴覚映像の弱さを克服するために払われる努力である。一方、日本では「多訓現象」を制限するため、定訓から外れた漢字の意味の摩滅が激しい。心理的実在としての字義を強化するには、漢字の字義を明示するネットワークの構築が有効である。そのネットワークとは、「脸-顔-面；吃-食-餐；大-巨-伟」という形式の中国語教育用『語素-語意味対応表』と「買-購；売-販」という形式の日本語学習用『音訓対応漢字表』である。それらを編制するための調査と研究が求められる。

参考文献

- 高更生、1990、『漢語語法專題研究』、濟南：山東教育出版社
高更生等、1996、『漢語教學語法研究』、北京：語文出版社
索緒爾、『普通語言學教程』、高名凱訳、商務印書館 1999 年版
呂文華、1999、『建立語素教學的構想』、『對外漢語教學語法體系研究』、北京語言文化大學出版社
王艾録、司富珍、2001、『漢語的語詞理拠』、北京：商務印書館
国家漢弁、2001、『漢語水平詞彙與漢字等級大綱』（修訂本）、北京：經濟科學出版社
国家漢弁、2010、『漢語國際教育用音節漢字詞彙等級劃分（国家標準）』、北京語言大學出版社
沈国威、2014、『漢外詞彙教學新探索』、大阪：関中研
山田孝雄、1940、『国語の中に於ける漢語の研究』、東京：宝文館
渡辺実、1971、『国語構文論』、東京：塙書房
宮島達夫、1973、『無意味形態素』、『国立国語研究所論集 4 ことばの研究 4』、東京：秀英出版
荒川清秀、1997、『近代日中学術用語の形成と伝播』、東京：白帝社
森岡健二、1999、『近代語の成立 明治期語彙編』（改定版）、東京：明治書院、初版 1969
沈国威、2002、『漢字形態素の類型と漢字語彙教育』、関西大学文学部中国語中国文学科編、『文化事象としての中国』、大阪：関西大学出版部
子安宣邦、2004、『漢字論：不可避の他者』、東京：岩波書店
荻生徂徠、『訳文筌蹄』（1715）、『荻生徂徠全集』第五卷、河出書房新社、1977 年

注

- 1) 本稿では、「字義」と称するが、これは個々の漢字の意味であって、文字列の意味ではない。
- 2) 索緒爾、『普通語言學教程』、高名凱訳、商務印書館 1999 年版、100～102 頁。
- 3) いわゆる表音文字である。
- 4) 『康熙字典』に漢字が 4 万以上収録されているが、多くの字は、発音不明であるか、どのようには読むかが分からない。中国の教育部門は、2005 年より中国語の使用状況について調査し、結果を録書にまとめて公開している。録書によれば、現代中国語の常用漢字数は、2500 字で推移している。これはパソコン等の普及により、ピンイン入力によって漢字を書く人が増え、読めない字は入力できないことに

起因する。日本語の仮名漢字過変換による漢字使用の増加と逆の事例として興味をそそられる。

- 5) 表中の数字は『現代漢語詞典』（第6版）による意味項目数である。ここで日本語の一字多訓を想起されたい。
- 6) 王艾録、司富珍著『漢語的語詞理掇』、北京：商務印書館、2001年、19～26頁。
- 7) もう1つの特徴は、特定の複合語の中にしか現れないことである。後述。
- 8) 下線部の字について、宮島達夫氏は「唯一形態素」と呼んでいる。宮島達夫『無意味形態素』、『国立国語研究所論集4ことばの研究4』、1973年、15～30頁参照。「唯一形態素」に関する議論は、高更生『漢語語法專題研究』（山東教育出版社、1990年、150～151頁）；高更生ら著『漢語教學語法研究』（語文出版社、1996年、53頁）；沈国威『漢字形態素の類型と漢字語彙教育』（関西大学文学部中国語中国文学科編、『文化事象としての中国』、関西大学出版部、2002年、377～397頁）等を参照。
- 9) 王艾録、司富珍著『漢語的語詞理掇』、24頁。
- 10) 中国語は孤立語と言われるが、意味の面から見れば非常に膠着的である。
- 11) 本稿の意味解釈は、『現代漢語詞典』（第6版）『新華字典』（第11版）による。
- 12) 中国語では漢字は音節と一対一の関係にある。
- 13) 宮島達夫前掲論文。
- 14) 合成語の下位分類として複合語と派生語を置く分析法もあるが、本稿では複合語のみ考察の対象とする。
- 15) 以上の議論は、渡辺実著『国語構文論』、東京：塙書房、1971参照。
- 16) 呂文華『建立語素教學的構想』、『對外漢語教學語法體系研究』、北京語言文化大學出版社、1999年、75～87頁。
- 17) われわれはいわゆる「基本単位」には異なるレベル：書写、発音、意味、文法があることをはっきり認識しなければならない。
- 18) これは漢字変換ソフトに負うところが大きいですが、過変換の結果と言わざるを得ない。
- 19) 関連する議論は、子安宣邦『漢字論：不可避の他者』（岩波書店、2004年）参照。
- 20) 荻生徂徠『訳文筌蹄』（1715）、『荻生徂徠全集』第五卷、河出書房新社、1977年、16、18頁。
- 21) いわゆる「同訓異字」、例えば「取、採、撮、捕、執、獲、撰、盜、録」などはいずれもTORUと読む。一方、「同訓異義」とは、上記の一連の漢字は同じ訓を持っているが、目的語との組み合わせが異なることを指している。この種の組み合わせ

せ上の相違は、中国語の意味体系の反映である。

22) 森岡健二『近代語の成立 明治期語彙編』(改訂版)、東京：明治書院、1999年、313～333頁。

23) 森岡健二前掲書、荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播』(東京：白帝社、1997年)はいずれも漢字語の造語過程における音訓変換の事実を指摘している。この問題をいち早く取り上げているのは、山田孝雄の『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館、1940年)である。最近の「刺激惹起性多能性獲得細胞」(STAP)においても音訓変換によって実現した部分もある。

附注：本稿は、2015年3月6日、東西学術研究所アジア文化研究センター(CSAC)の研究例会「漢語・漢字文献と言語接触」での口頭発表「漢字の意味とその獲得：日中比較対照の試み」を加筆したものである。会場にて参加者より貴重なコメントを賜わり、感謝を申し上げる。なお、本稿の中国語訳ダイジェストは、『日語研究』(北京：商務印書館)に掲載される予定である。